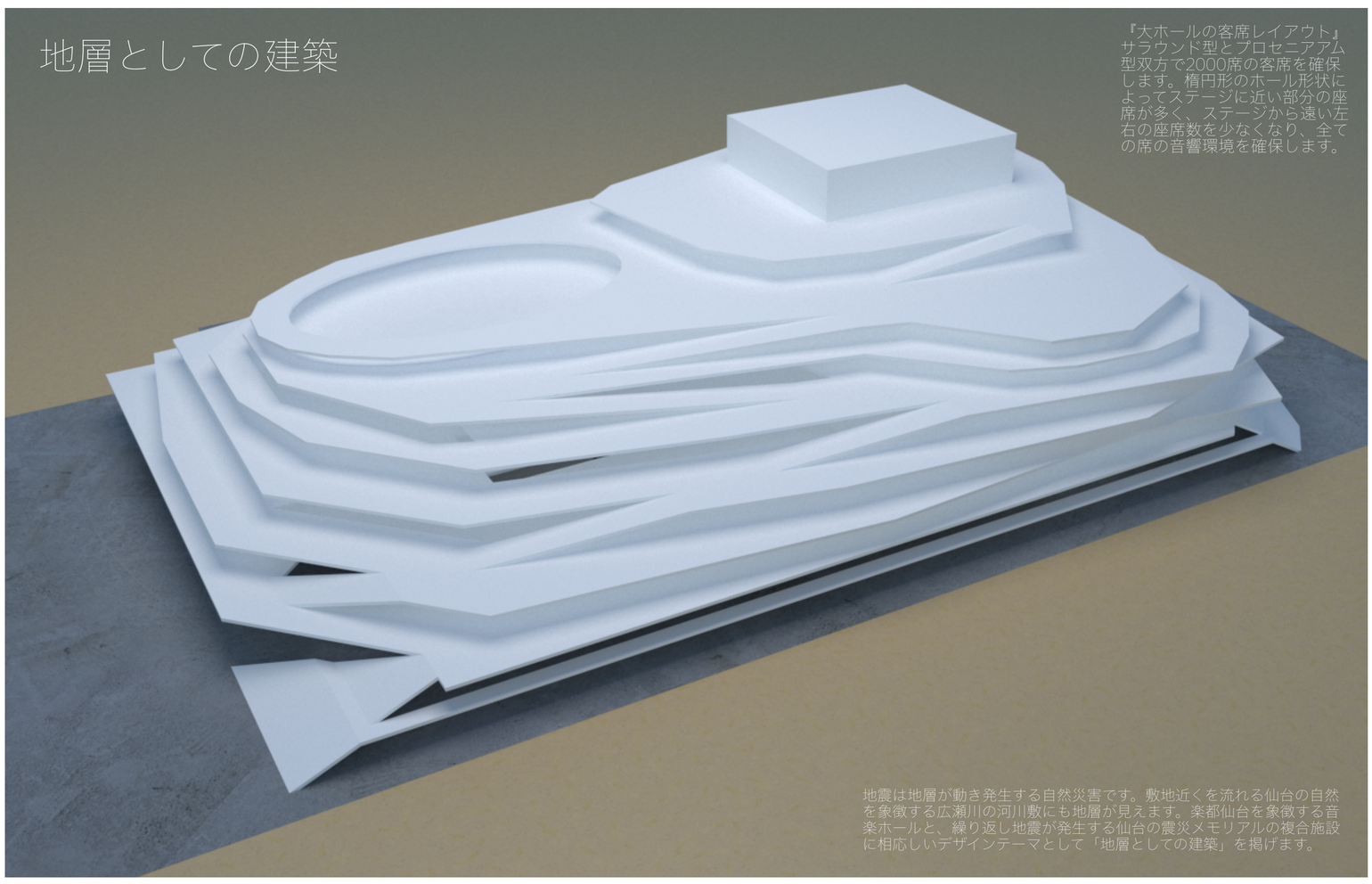
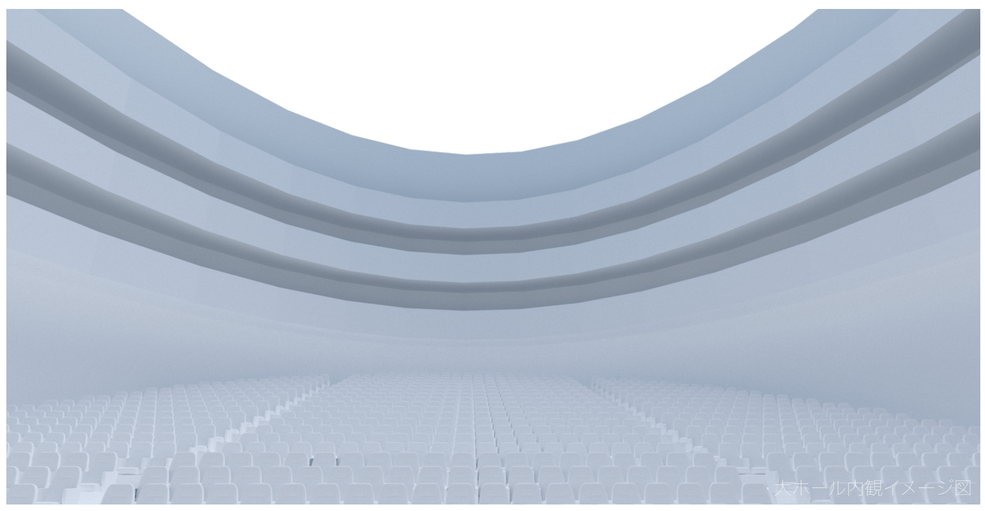
地層としての建築

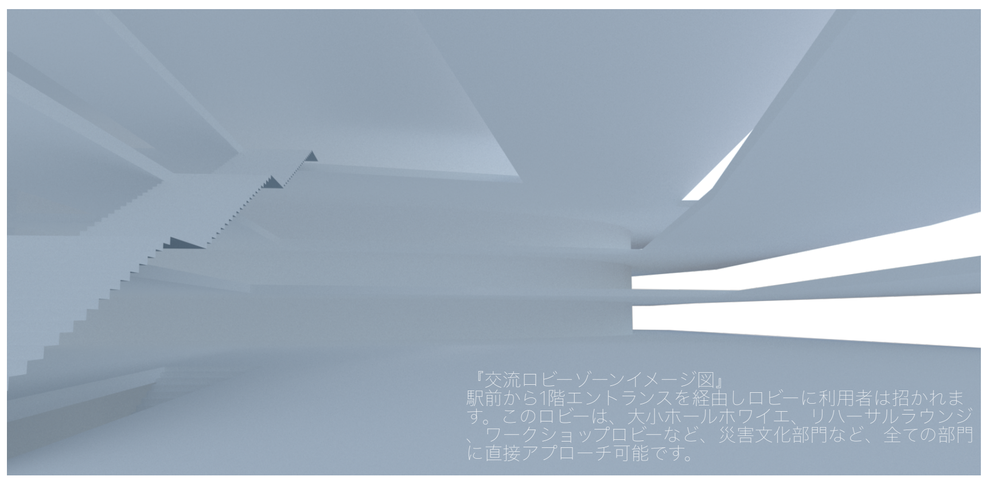


『大ホールの客席レイアウト』
サラウンド型とプロセニアアム型双方で2000席の客席を確保します。楕円形のホール形状によってステージに近い部分の座席が多く、ステージから遠い左右の座席数を少なくなり、全ての席の音響環境を確保します。

地震は地層が動き発生する自然災害です。敷地近くを流れる仙台の自然を象徴する広瀬川の河川敷にも地層が見えます。楽都仙台を象徴する音楽ホールと、繰り返し地震が発生する仙台の震災メモリアルの複合施設に相応しいデザインテーマとして「地層としての建築」を掲げます。



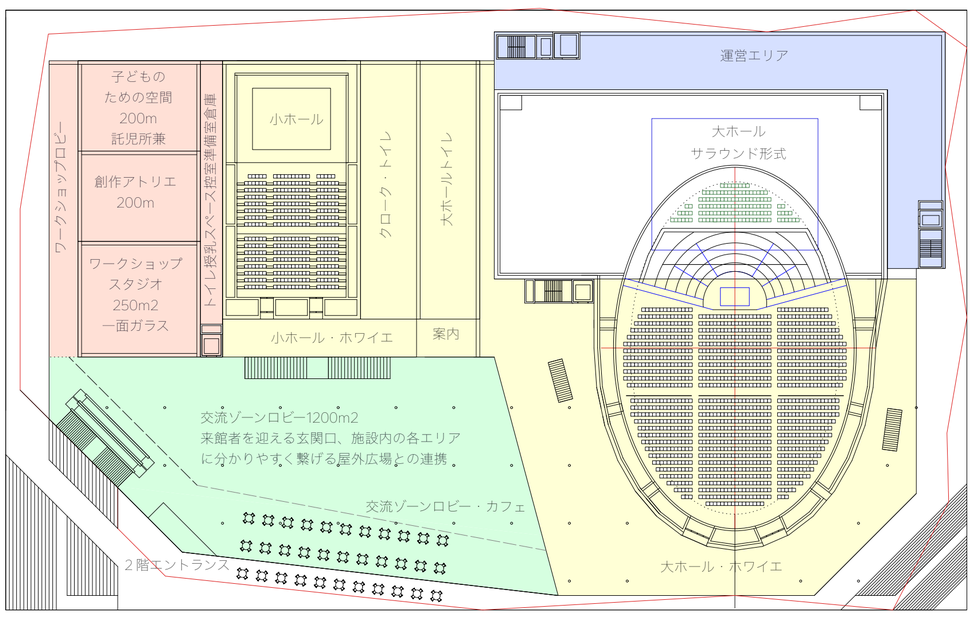
大ホール内観イメージ図



『交流ロビーゾーンイメージ図』
駅前から1階エントランスを経由しロビーに利用者は招かれます。このロビーは、大小ホールホワイエ、リハーサルラウンジ、ワークショップロビーなど、災害文化部門など、全ての部門に直接アプローチ可能です。

『ワークショップゾーン』
一般利用者が多いと予想されるワークショップゾーンは２階ロビーに面して配されます。奥に子どものためのスペースを配し、子ども連れが安心して施設を利用できます。

『アーティストフロアとオーディエンスフロア』
音楽ホール関連部門は主に１階と２階に集約化しています。１階は主にプロユースのアーティストフロア。２階は主に観客中心のオーディエンスフロアです。また練習室やリハーサル部門は、一般ユーザーの利用も考慮して、１階エントランスや２階ロビーからも共にアクセス可能です。また大ホールの楽屋ラウンジは、リハーサルラウンジとの連続しており、国際会議やイベントなど、様々な利用方法にも柔軟に対応できます。



2Fイメージ図(GL+6m)

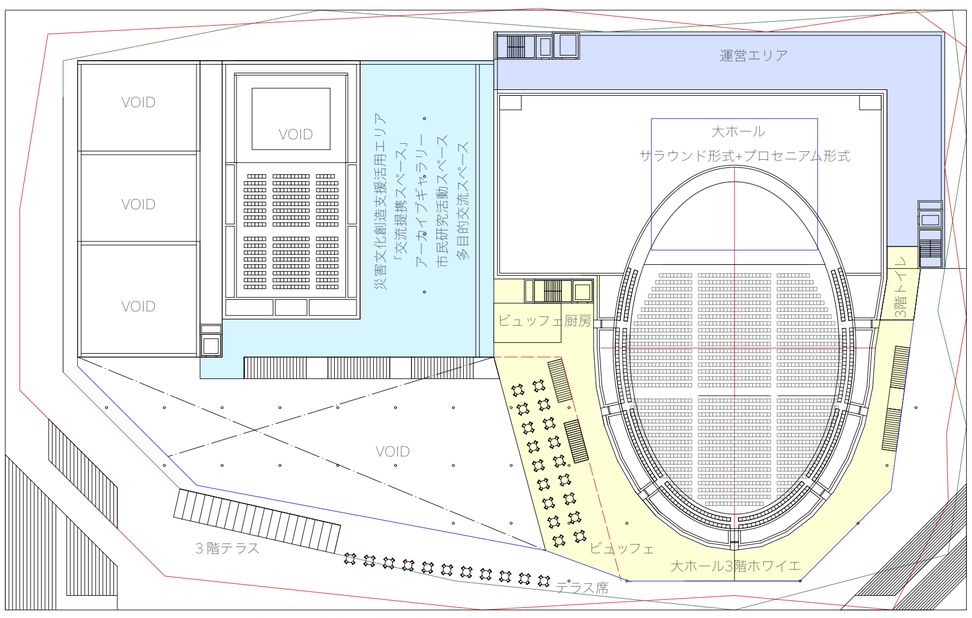
『大ホールのステージ構成』
通常のプレセニアム形式では10間四方の舞台と同じ大きさの袖舞台を確保し、高さ制限限度の30mのフライホールを確保します。サラウンド型のホール形式では、オーケストラピット部分にステージを迫り上げ自動組立式の楕円形状の反射板を背面に設置します。

『小ホール』
シューボックス型の小ホールは、大ホール同様の木の楽器としての音響性能を確保するのと同時に、様々な利用にも対応できる柔軟性を持ちます。

『大ホールの舞台変換』
オーケストラ舞台の後ろ側の客席は奈落から上昇させます。舞台裏側の楕円形状のプロセニアムは分割し舞台後方と袖舞台に巨大な建具として収納します。可変部分は意匠的には連続しますが、軽量で自動設置可能です。

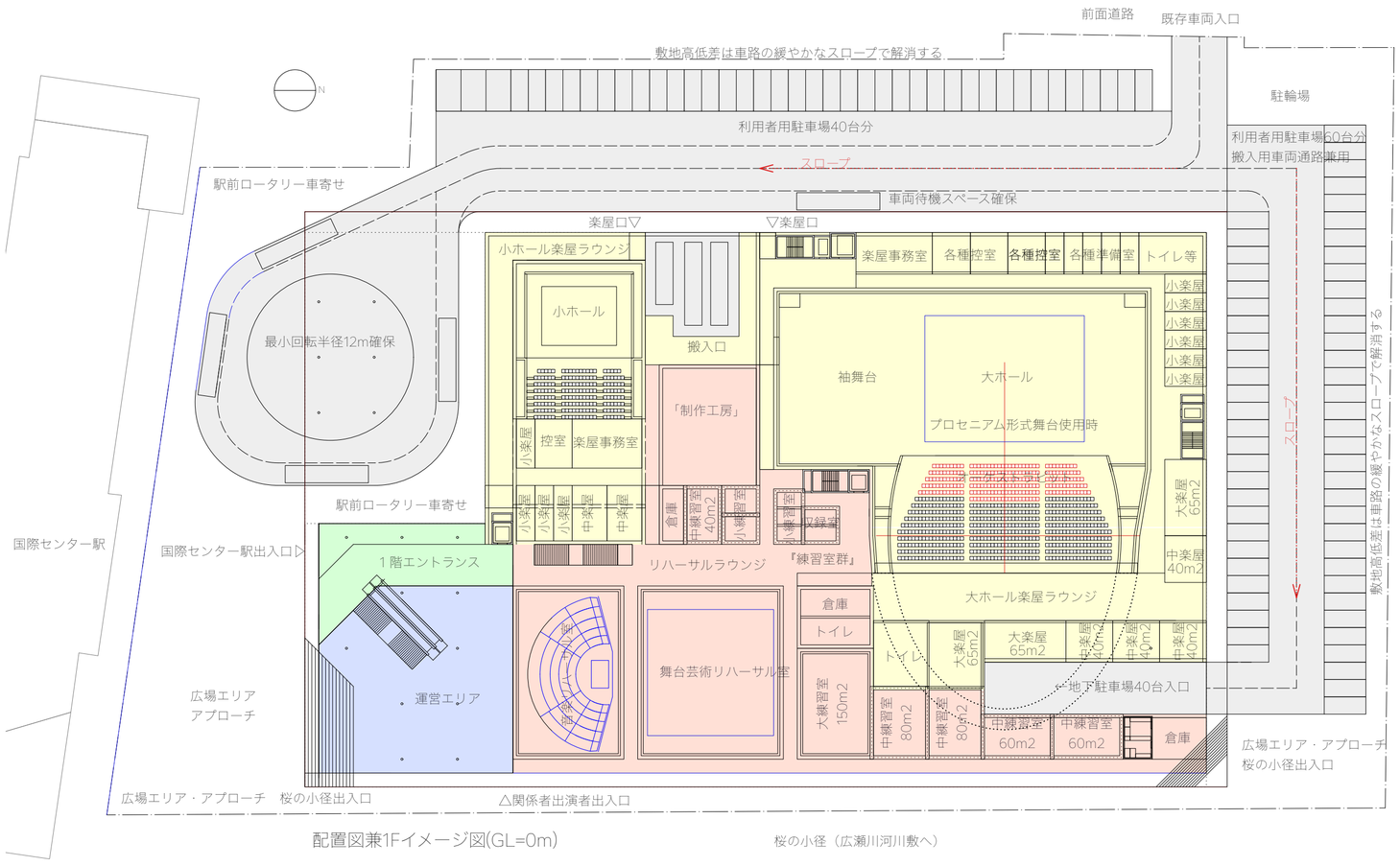
『楕円形状のホール』
唯一無二の独創的なサラウンド型のコンサートホールとして今まで音楽ホールの定石には無かった楕円形状のホールを提案します。音響工学が未発達の時代においては楕円形状は避けられていましたが、音響工学が進んだ現代こそ採用可能なホール形式です。反射板は軽量なファブリック膜を採用し、ホール内部の仕上壁の裏側に音響バッファーゾーンを確保し最適化します。

『室内音響の可変性』
公演種目による最適室内残響時間が確保できる様に音響板を天井・壁面に設置し、公演種目に合せて残響時間をプレセットできる様にします。

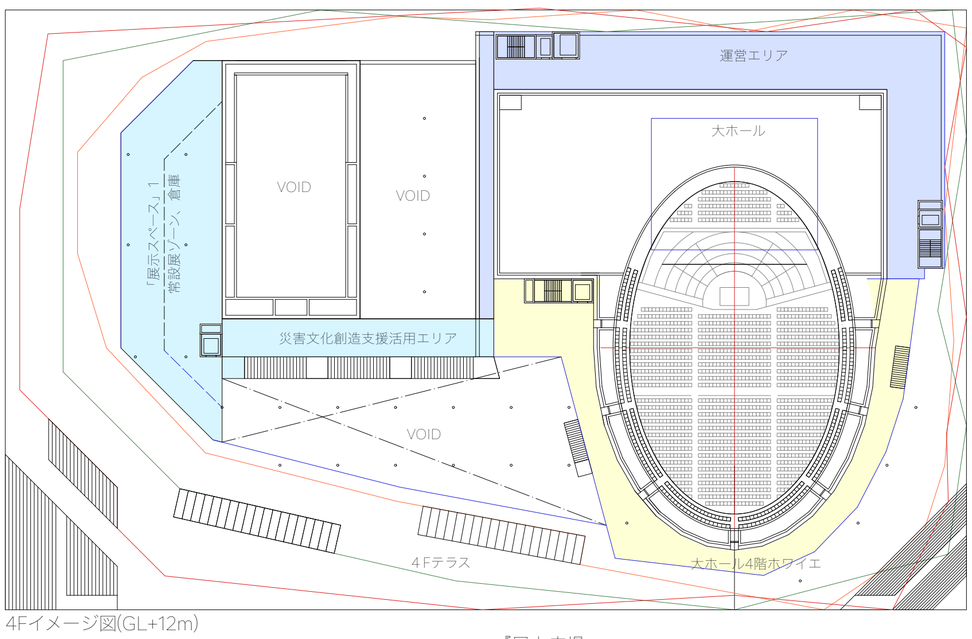


3Fイメージ図(GL+9m)

『災害文化創造支援発信エリア』
３階から上の上部階に震災メモリアル機能が配されます。交流ゾーンロビーは５階まで吹抜けており、２階から５階まで緩い勾配の直階段で繋がれています。
６階屋上にはクワイエットスペースが屋外に配されますが、楕円の窪みは、内部空間にも現れ、震災メモリアルの各施設から垣間見れます。５階部分からクワイエットスペースにフラットにアクセス可能です。災害文化創造支援発信エリアそのものが、屋上広場への内部アクセス動線を兼ねています。



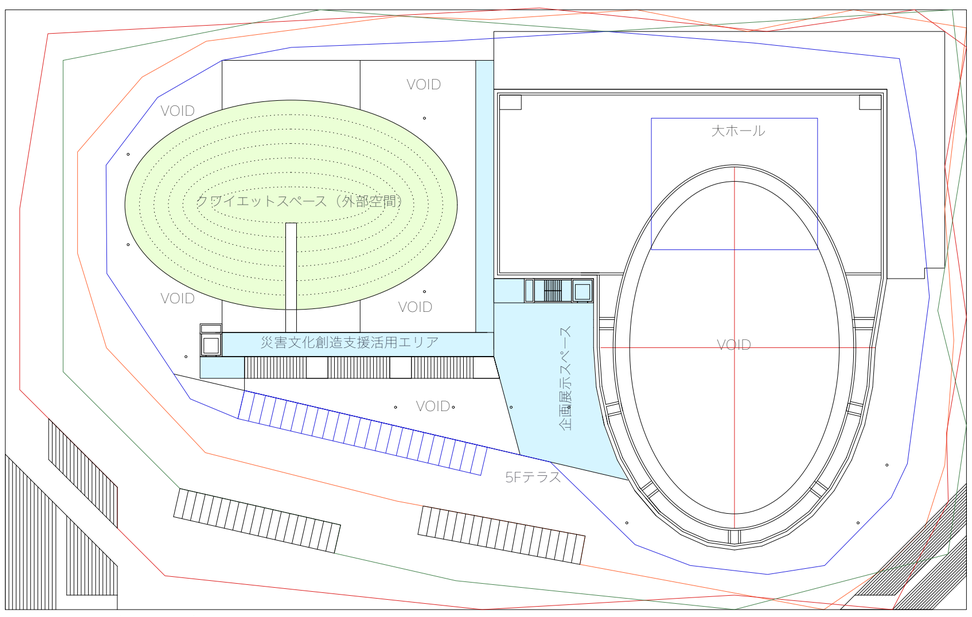
配置図兼1Fイメージ図(GL=0m)



4Fイメージ図(GL+12m)

『クワイエットスペース』
６階レベルの屋上には、屋外広場としてクワイエットスペースが配されます。大ホール内部と同じ大きさの楕円形状の窪みです。降りる最深部に降りることが出来ます。目線が人の高さにより深いために周囲の環境と切れ、高まる感情を鎮めたり物想いに耽る人々に開かれた場所となります。

『屋上広場』
震災メモリアル機能とホール文化芸術機能を等価のものとするため、屋上を屋外広場と捉え、クワイエットスペースなどに至る立体的な都市公園として取り扱います。イベントロビー、大ホールホワイエなどの外部動線として、主に広瀬川河川敷と視界的に繋がる東側を中心に、セットバックしながら上部階の広場へと誘います。



5Fイメージ図(GL+15m)

『音楽リハーサル室』
エントランス近くに配し様々なイベントに活用することを想定する。天井高を確保する意味も兼ねてオーケストラステージは下部可動とし、小規模な円形劇場としての機能も有します。倉庫やピアノは稼働ステージを利用し地下に収納します。

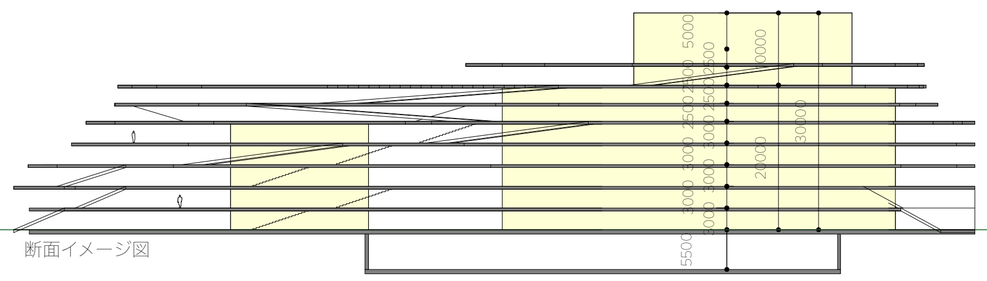
『制作工房』
搬入口と大小ホールの舞台に隣接し配置する。リハーサルラウンジとも近く、ワークショップなどの様々な利用にも対応可能です。

『リハーサル練習室群』
１階に集約化して配置しリハーサルラウンジを１階エントランスと２階ロビーから直接アクセスすることで、一般ユーザーや国際会議などでの利用も可能とする。また練習やリハーサルは日中に行うことを考慮し諸室を桜の小径に面してレイアウトすることで周囲の豊かな環境を取り込む。

『大ホール楽屋』
舞台袖に機能的に配置されます。大中楽屋は客席下のスロープ状の天井面を持つ楽屋ラウンジに面して設置し、楽屋ラウンジが、リハーサルラウンジとも繋がることで、
国際会議などで表動線からも利用可能です。

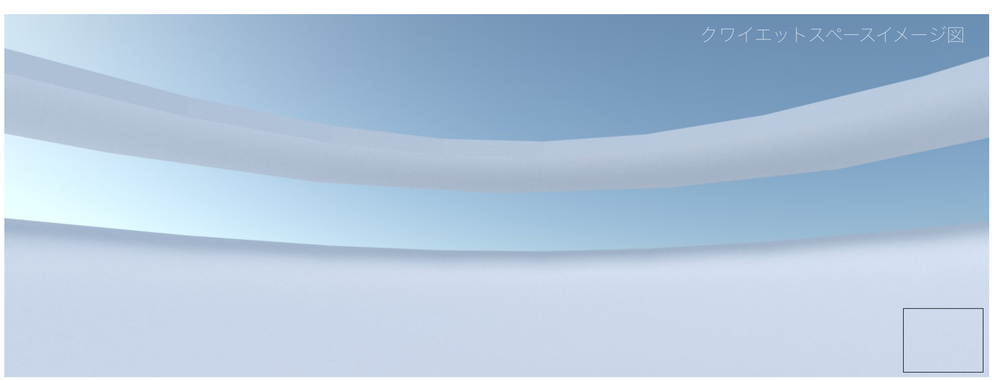
『楽器としてのホール』
コンクリートの躯体に入れ込んだ楽器としての音楽ホールを意識し、木質とファブリックを組み合わせて高い音響性能を確保します。

『構造計画』
構造は400mm厚のボイドスラブを基本としたRC造で、大空間はスチールの柱で支持します。遮音性能の確保も兼ねた免震構造を採用します。



断面イメージ図

建物と周辺環境は調和し豊かな自然と一体化する建築の佇まいを見せます



クワイエットスペースイメージ図